

## 英語の状態変化動詞の自他交替について\*

熊澤 清美

## 1. はじめに

自他交替 (Causative Alternation) とは、ある動詞が自動詞としても他動詞としても用いられる現象である。英語の状態変化動詞には、自他交替する動詞、他動詞用法しかない動詞、自動詞用法しかない動詞がある。自他交替する動詞には、break, close, freeze, melt, open などの動詞がある。次の例で確認してみよう。

- (1) a. Pat broke the window.
- b. The window broke.
- (2) a. The sun melted the ice.
- b. The ice melted.

break や melt は、(1a)、(2a)のように他動詞として用いられると共に、(1b)、(2b)のように、他動詞の目的語が主語となって自動詞としても用いられる。

次に、他動詞用法しかない状態変化動詞を見てみよう。英語の destroy, demolish, ruin, kill, assassinate, pollute などの動詞は、次の(3a)、(4a)のように他動詞用法しかなく、いずれも(3b)、(4b)のように自動詞では用いることができない。

- (3) a. The army destroyed the temple.
- b. \*The temple destroyed.
- (4) a. The accident nearly ruined his career.
- b. \*His career nearly ruined.

一方、自動詞用法しかない状態変化動詞には、bloom, blush, deteriorate, flourish, thrive などがあり、これらの動詞は、次の(5b)、(6b)のように他動詞にはならない。

- (5) a. The roses bloomed.
- b. \*The sun bloomed the roses.
- (6) a. Mary blushed with pleasure.
- b. \*Pleasure blushed Mary.

さらに興味深いことに、自他交替する動詞であっても、その動詞の表す事態によっては、自動詞として用いることができない場合がある。次の例で確認してみよう。

- (7) a. John opened the window.
- b. The window opened.

- (8) a. John opened the beer.  
b. \*The beer opened. (都築 2010: 63)

(7)のように、open は「窓を開ける」「窓が開く」という意味では自他交替するが、(8a)のように「ビールを開ける」とは言えても、(8b)のように「\*ビールが開く」とは言えない。

本稿では、英語の状態変化動詞が自他交替をする場合と、他動詞用法のみ、自動詞用法のみの場合の違いを意味の上から考察し、それぞれの場合の動詞の意味特徴を明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

### 2.1 Levin and Rappaport Hovav (1995) の分析

Levin and Rappaport Hovav (1995) (以下 L&RH) は、英語の自他交替動詞に関して、「外的使役」と「内的使役」という 2 つの概念を導入している。L&RH は、まず、この 2 つの概念を、非能格動詞と非対格動詞の違いを示すのに用いた。非能格動詞、非対格動詞とは、Perlmutter (1978) <sup>1)</sup> が示した自動詞の 2 分類である。非能格動詞には、主語の意図的行為を表す play, run, talk, walk, work などの動詞があり、これらの動詞は主語に agent (動作主) を持つ。一方、非対格動詞には、主語の非意図的な事象を表す break, melt, open のような状態変化動詞のほかに、appear, exist, happen などの出現や存在を表す動詞があり、これらの動詞の主語は theme (主題) となる。L&RH は、非能格動詞が意図性を持つ動作主を主語にとることから、「内的使役」を表すものとし、一方、非対格動詞は、主語に意図性がなく、外部からの働きかけによって起こる事態を表すことから、「外的使役」の意味をもつと述べている。そして、この「内的使役」「外的使役」の概念を状態変化動詞にも適用し、外的な働きかけによって起こる事態を表す動詞を「外的使役動詞」、変化対象物の内的な要因によって起こる事態を表す動詞を「内的使役動詞」と分類している。それぞれの動詞の例を次にあげておこう。

- (9) 外的使役動詞 : break, close, open, shatter, shut, smash, grow, heal, roll, sink, kill, murder, destroy, ruin など  
(10) 内的使役動詞 : bloom, blush, corrode, decay, decompose, deteriorate, erode, fade, rot, rust, tarnish, wither など

L&RH によると、外的使役動詞の特徴は次のようなものである。

- (11) 外的使役動詞の特徴  
a. 他動詞として用いることができる。

- b. 動作主や道具、自然の力、状況などが主語になれる。
- c. 自動詞として用いる場合も、統語上に示されない外的使役の存在が含意される。

(11a)の他動詞用法については、第1節の(1-4)の(a)にあげる文で確認できる。(11b)の主語の多様性については、次の(12a)が示すように、外的使役動詞である **break** は、**the vandal** (動作主)、**the rock** (道具)、**the storm** (自然の力) を主語として持つことができることから確認できる。また、状況が主語になれる主語の例として、(12b)があげられる。(12b)では、「たくさんの本を読むこと」という「状況」が **open** の主語となり、人生の大いなる可能性に彼の心を「開いた」という事態の使役主となっている。

- (12) a. **The vandal / The rock / The storm broke the window.**  
 (L&RH 1995:103)
- b. **Reading a lot of books opened his mind to life's greater possibilities.**

L&RH は、**break** や **open** のような自他交替する動詞とは対照的に、**murder** や **cut** などの他動詞用法しかない外的使役動詞は、道具や自然の力などの非意図的な主語を持ってないと述べている。

- (13) a. **\*The explosion murdered the senator.**
- b. **\*The lightning cut the clothesline.** (L&RH 1995:102-103)

そして、そのことが、他動詞用法のみの動詞が自動詞として用いられることを阻んでいると説明している。

- (14) a. **\*The senator murdered.**
- b. **\*The clothesline cut.**

次に、外的使役動詞の特徴(11c)については、**break** が自動詞として用いられている(15)の例で確認しよう。

- (15) **I threw the plate against the wall, and it broke.** (L&RH 1995:107)

(15)では、皿が割れた理由は **it broke** の自動詞文では明示されていないが、文脈からもわかるように(つまり、話し手が皿を壁に投げつけた衝撃)、外的な力が作用して「割れる」

という変化が起こったことは容易に読み取れる。このような自動詞用法を L&RH は、他動詞からの「脱使役化」によって生じる現象であると説明している。つまり、break などの動詞が自動詞になる場合、使役主である主語は、統語上では「抑制」(suppressed) されるため現れないが、意味の上では含意されているということである。そして、脱使役化が可能となるのは、使役主が未指定の場合に限ると述べている。(11b)が示すように、他動詞の主語に、動作主のほか、道具や自然の力、状況などがなれる場合に、「脱使役化」が起こり得るということである。

一方、内的使役動詞の特徴として、L&RH は次の(16)の2点をあげている。

(16) 内的使役動詞

- a. 変化対象物の内在的な性質や要因によって、変化対象物が自ら引き起こす変化を表す。
- b. 他動詞として用いることができない。

第1節の(5)と(6)が示すように、内的使役動詞の bloom や blush は、自動詞用法のみである。L&RH は、bloom (花が咲く) や blush (赤面する) といった変化事態は、厳密に言うとならば、何らかの外からの働きかけがあるとも捉えられるが(花が咲くのに適切な世話をするなど)、一般的に言って、主語である変化対象物の内在的な要因によるものとみなすことができる、と説明している。そして、これらの動詞が、使役主を主語として明示する必要のある他動詞になれないのは、こうした理由によると説明している。

## 2.2 Levin and Rappaport Hovav (1995)の分析の問題点

L&RH (1995) の内的使役と外的使役による分析は、一見、状態変化動詞の自他交替をうまく説明できるように思われる。しかし、詳細に検討すると、少なくとも以下の3つの問題が明らかになる。

まず第1に、上記の(16b)の特徴に反して、内的使役動詞の中には、他動詞として用いることができるものがある。次の例を見てみよう。

- (17)
- a. Too much sugar will rot your teeth.
  - b. The steady dripping of water rusted the metal stopper in the sink.
  - c. Wind and rain have eroded the statues into shapeless lumps of stone.

rot, rust, erode は、いずれも L&RH の分類では内的使役動詞であるが、自動詞として用いられるだけでなく、(17)が示すように他動詞としても用いられる。したがって、内的使役動詞は自動詞用法のみという L&RH の主張は、妥当ではない。

第2の問題として、他動詞用法しかない外的使役動詞のなかには、非意図的な主語をとれる動詞があるという点である。次の例を見てみよう。

- (18) a. A stray bullet killed Bill.  
b. An explosion destroyed the bus.  
c. In mountain valleys frost sometimes damaged the cereal.  
d. The knife cut the cake.

(13a) (= \*The explosion murdered the senator.) の *murder* とは異なり、(18a-c) の *kill* や *destroy*, *damage* などは、無生物の非意図的な主語をとることができる。また(13b) (= \*The lightning cut the clothesline.) のように、自然の力が主語になれない *cut* でも、(18d) のように道具 (*the knife*) の場合は、無生物でも主語になれる。

3つ目の問題は、そもそも L&RH の内的使役、外的使役の分類は、その判断基準が明確でないということである。次の例を見てみよう。

- (19) a. The plaster cast helps to heal the broken bone.  
b. Most leg ulcers will heal spontaneously.

*heal* は外的使役動詞に分類されている。この分類は、(19a) のような他動詞の場合は、主語が外的使役であるため問題ないが、(19b) の「潰瘍が自然に治癒する」という自動詞文において、統語上に現れていない外的使役の存在が含意されているかどうかの判断は明確にはできない。場合によっては、内的使役動詞の特徴である「内在的な要因」によって治癒したとも解釈できないだろうか。こうした理由から、*bloom* や *rust*, *rot* が内的使役で、*heal* が外的使役とする判断基準が曖昧であると言わざるを得ない。

以上の3点から、L&RH の内的使役、外的使役の分類は、状態変化動詞の自己交替を捉えるのには不十分であることがわかる。

## 2.3 その他の先行研究

### 2.3.1 影山 (1996) の分析とその問題点

影山 (1996) は、英語の自己交替が他動詞の「反使役化」によって起こる現象だと説明している。反使役化現象とは、他動詞文では、その主語が動詞の目的語に働きかけて何らかの変化を起こすと捉えるのであるが、自動詞文では、主語である変化対象物自身が変化を起こす使役主であると捉えることである。つまり、変化対象物と使役主が同化したとみなすものであるが、語彙概念構造では、(20) のように表される。

- (20) [ x CONTROL [ y BECOME [ y BE AT-z ] ] ]  
 → [ x = y CONTROL [ BECOME [ y BE AT-z ] ] ] (影山 1996:145)

つまり、**The door opened.**のような文では、ドア自身の力でドアが開いた((20)の[x=y])と捉えるのである。

影山は、自動詞文の主語が変化対象物で、かつ使役主と捉えることが可能である証拠として、**自他交替動詞の自動詞文**が、次のように副詞句 **all by itself** (ひとりりで、勝手に)と共起することをあげている。

- (21) a. The ship sank all by itself.  
 b. The glass broke all by itself. (影山 1996:151)

(21a)では、船が自らの力で勝手に沈み、そして(21b)では、ガラスがひとりりで勝手に割れたと解釈できると言うわけである。また、影山は、無生物の変化対象物でも次のような命令文になると主張している。そして、変化対象物が自らの意志を持つことの証しであるとして、反使役化が裏付けられると述べている。

- (22) a. Sink, boat!  
 b. Close, door! (影山 1996:154)

しかし、影山(1996)の反使役化の考え方には大きな問題があると思われる。**The glass broke.** や **The car stopped.** のような自動詞文において、反使役化の考えだと、ガラスや車が自らの力で割れたり、止まったりしたと捉えるわけであるが、これは妥当ではない。言語表現としてこのような自動詞文が可能ではあっても、私達は何らかの要因で(例えば、誰かがガラスを落としたり、地震があったり、ドライバーが車のブレーキを作動させたりして)、ガラスが割れたり、車が止まったことを了解している。したがって、上のような反使役化の考え方には疑問を抱かざるを得ない。

さらに、影山(1996)が反使役化の証拠としてあげている(22a, b)は、命令文ではない。これらは、話者の願望を表す祈願文であり、<sup>2)</sup> それぞれ次のように言いかえられる。

- (23) a. May the boat sink.  
 b. May the door close.

つまり、(22)で、boat や door は、意志を持つ使役主ではあり得ない。したがって、「変化対象物=使役主」という考えは受け入れられない。先にも述べたように、**The door opened**



かけることによって、蝶番などのドア自体の機能が作動し、「ドアが開く」と捉えるというのである。しかし、故意に花瓶を床に叩きつけるなどして粉々に壊す事態を、自他交替動詞 *smash* を用いて、*I smashed the vase.* と表現した場合でも、使役主の行為を単なるきっかけとみなし、花瓶が自律的に「粉々になった」と捉えるのは不自然であり、妥当であるとは考えられない。また、使役主の役割が大きい事態とは、具体的にどのような事態なのかの説明も不十分である（この点については、3.2.1 節で詳しく検証する）。したがって、丸田（1998, 2000）や都築（2010）の分析にも問題があると考えられる。

### 3. どのような動詞が自他交替するのか

それでは、いったい英語の状態変化動詞が自他交替するには、どのような条件が必要なのだろうか。本節では、自他交替する動詞、他動詞用法のみの動詞、自動詞用法のみの動詞が表す事態を、それぞれ詳しく見ていこう。

#### 3.1 自他交替する動詞

自他交替する動詞は第 1 節の(1)、(2)、(7)で提示したが、ここでもう一度その例を確認しておこう。

- |      |    |                         |          |
|------|----|-------------------------|----------|
| (27) | a. | Pat broke the window.   | (= (1a)) |
|      | b. | The window broke.       | (= (1b)) |
| (28) | a. | The sun melted the ice. | (= (2a)) |
|      | b. | The ice melted.         | (= (2b)) |
| (29) | a. | John opened the window. | (= (7a)) |
|      | b. | The window opened.      | (= (7b)) |

これらの動詞が表す状態変化には、どのような特徴が見られるだろうか。(27)の「壊す」という意味の *break* は、第 2 節の(12a)が示すように、動作主以外に、道具や自然の力でも主語になれる。すなわち、*break* が表す状態変化をもたらす手段には多様性があり、不特定であると言える。また *melt* も、(28a)のように太陽という自然の力が氷を溶かす意味でも用いられるし、次の(30a)のように、バターを中火にかけて意図的に溶かすという意味でも用いられる。*open* もまた、(29a)では動作主が主語だが、(30b)のように風の力などでも主語になりうる。

- |      |    |   |
|------|----|---|
| (30) | a. | You need to melt the butter over medium heat. |
|      | b. | The wind opened the window.                   |

以上の考察から、**break** や **melt**、**open** のような自他交替する動詞の特徴について、次のことが言える。

- (31) 自他交替する動詞が表す変化事態は、その変化をもたらす手段が特定されず、多様性がある。

これは、2.1節で考察した **L&RH** の脱使役化の条件である「使役主が未指定」と一致する。では、なぜ、変化手段が不特定であると、自動詞で表現することができるのであろうか。それは、変化が、どのようにもたらされたのかということには焦点が当てられず、変化事態そのものに焦点が当てられるため、変化をもたらす使役主を主語として明示しなくてもよいからである、と考えられる。加えて、自他交替動詞が自然の力などを主語にできることから、それらの動詞が表す事態を、人間の働きかけなしに、「自然に起きたもの」と概念化することが可能であると言える。もちろん、この自発性はあくまでも概念上のものであり、現実には、外部からの意図的な働きかけがあって起きた変化の場合でもかまわないのである。決して、変化対象物が「自らの力で変化した」と、概念上で捉えている訳ではない。

自他交替する動詞には、2.2節で指摘したように、**L&RH** が内的使役動詞として分類する動詞もある。それらの動詞を次に見てみよう。

- (32) a. The rain has rusted the gate.  
b. The gate has rusted.
- (33) a. The long exposure to the air tarnished the silver.  
b. The silver tarnished.

(32)の **rust** (錆びる、錆びさせる)、(33)の **tarnish** (変色する、変色させる) の共通する意味は、「物の質が落ちる」や「状態が悪化する、劣化する」という意味である。そして、これらの動詞が表す変化事態においては、変化対象物が本質的にその変化傾向を備えていると言ってよい。鉄はそれ自体に錆びる性質があるし、銀もほっておけば変色する。つまり、それらの変化には自発性の概念が存在する。**rust** や **tarnish** が他動詞になるのは、そうした変化を助長する直接的な原因を主語にする場合であって、通常、動作主が主語になることはない。

- (34) a. ?John rusted his bicycle.  
b. ?Mary tarnished her silver ring.

(34)のような表現が可能の場合があるとすれば、それは、動作主が極めて意図的に自転車を錆びさせたり、銀の指輪を変色させたりした場合に限られる。

以上のことから、次のことが言える。

- (35) 「物の質が落ちる」「状態が悪化する、劣化する」という意味を表す動詞は、その変化を直接的に助長する存在や条件を主語にした他動詞文を作ることができるため、自他交替が可能となる。<sup>4)</sup>

ここまでの整理すると、自他交替する動詞は、次のような2つのタイプがある。

- (36) a. 変化をもたらす手段に多様性がある動詞 : break, burst, close, condense, dry, expand, freeze, melt, open, shatter, smash など  
b. 物の質が落ちる、状態が悪化する、劣化する意味を表す動詞 : rust, rot, erode, fade, decay, decompose, tarnish, wither など

この点をまとめると、英語の状態変化動詞の自他交替の要因は、その自動詞表現における「自発的变化」の概念が可能か否かであると言える。

## 3.2 自他交替しない動詞

### 3.2.1 他動詞用法のみの動詞

次に、他動詞用法のみの動詞について見てみよう。

- (37) a. The army destroyed the temple. (= (3a))  
b. \*The temple destroyed. (= (3b))  
(38) a. The accident nearly ruined his career. (= (4a))  
b. \*His career nearly ruined. (= (4b))

上記の destroy や ruin の他に、damage や kill などが他動詞用法のみの状態変化動詞の例としてあげられるが、これらの動詞の意味特徴は、「壊す」という意味でも、break や shutter などより、はるかに程度の大きな「破壊行為」であると言える。多くの場合、存在そのものを消してしまう、または修復不可能な程度にまで及ぶ。そして、そうした変化を引き起こす使役主の役割や責任は重大であるため、その存在を必ず明示しなくてはならない。

cut や chop のように自動詞として用いられない動詞も、使役主の役割の大ききで説明できると考えられる。これらの動詞は、「刃物」を用いて切るという意味だが、「刃物」という道具が特定されているため、必ずその道具を用いる使役主を明示しなくてはならず、そ

のため次のように自動詞にはなり得ない。

- (39) a. She cut the cake.  
b. \*The cake cut.
- (40) a. She chopped some tomatoes.  
b. \*Some tomatoes chopped.

また、英語では、「水」が使役主となる動詞（例えば、wet や dampen）も自動詞にはならない。次の例を見てみよう。

- (41) a. Some light rain wet the track enough to delay the session.  
b. \*The track wet.
- (42) a. A mist of water dampened the leaves.  
b. \*The leaves dampened.

wet や dampen などの「濡らす」という意味の動詞は、(41b)、(42b)のように自動詞では用いられない。一方、burn や ignite、kindle などの「火」という特定の使役主を持つ動詞は、次の (43)、(44)の例のように、他動詞で「燃やす」という意味でも、自動詞で「燃える」という意味でも用いられる。

- (43) a. She burnt the letter.  
b. The letter burnt.
- (44) a. The old man ignited his pipe.  
b. The pipe ignited.

では、なぜ英語では burn や ignite は自他交替し、wet や dampen は他動詞用法のみなのだろうか。あるモノが「燃える」場合、いったん火をつけると、多くの場合、その火は燃え広がる。モノが燃えきるまで火をつけ続けなくてもよい。自然発火も現実に起こりうる。一方、あるモノが「濡れる」には、一定量の水分を与えなければならず、場合によっては、例えば(41a)などの場合には、ある程度の時間、雨が降っていないと問題となっている現象は起こり得ない。こうした点から、「燃える」よりは「濡れる」方が、その使役主の役割が大きいと言える。また、「燃える」では、自然発火現象が可能であるのに対し、「濡れる」には自然発生的な概念が欠けるため、英語では自動詞にならないと推測される。

そのほか、L&RH (1995)、影山 (1996)、丸田 (1998, 2000)、都築 (2010) でも指摘されているが、自他交替動詞でも変化対象物の性質上、次のように自動詞用法が不適格と

なる場合がある。

- (45) a. John opened the beer. (= (8a))  
b. \*The beer opened. (= (8b))

「ビールを開ける」という事態は、人間が意図的に行うのであって、決して自発的に起こるものではない。このような人間の介入なしには起こり得ない事態は、他にも、break a promise や clear the table などがあり、これらの表現は自動詞にはならない。また、murder は kill とは異なり、非意図的な主語がとれないことから明らかであるが、人間の意図的な行為としてしか認識できない。

ここまで考察してきたことから、他動詞用法のみの動詞は次の3タイプに分類することができる。

- (46) a. 存在を消す、または修復不可能なほどの程度の大きい変化を表す動詞： damage, destroy, demolish, ruin, kill, pollute など  
b. 状態変化の手段（道具、水）が特定されている動詞： chop, cut, knife, saw, wet, moisten, dampen など  
c. 意図的な動作主の介入なしには起こり得ない事態を表す動詞、表現： assassinate, fix, murder, repair, break a promise, clear the table, open the beer など

各タイプの動詞の意味に共通するのは、使役主の変換事態に対する重大な役割や責任が示されているということである。これらの動詞の表す事態においては、使役主の存在は必ず明示する必要があり、したがって自動詞で表すことができないのである。

### 3.2.2 自動詞用法のみの動詞

最後に、自動詞用法のみの動詞を考えよう。第1節の(5)、(6)で見た bloom と blush 以外の動詞の例を、次の(47-50)で見よう。

- (47) a. My tomatoes are flourishing this summer - it must be the warm weather.  
b. \*The warm weather is flourishing my tomatoes.
- (48) a. The animals thrived in the rich grasslands.  
b. \*The rich grasslands thrived the animals.

- (49) a. Kent's face paled when he saw Rob having a knife.  
 b. \*Rob's having a knife paled Kent's face.
- (50) a. Janet shuddered when she looked closer and saw human skulls.  
 b. \*The sight of human skulls shuddered Janet.

上記の例を見ると、自他交替しない自動詞用法のみの動詞は、意味の上で大きく2つに分かれることがわかる。(47)の flourish (繁茂する)や(48)の thrive (うまく育つ)、そして(5)の bloom (花が咲く)は、いずれも生物の豊かな成長を意味する。また、(6)の blush (赤面する)や(49)の pale (青ざめる)、(50)の shudder (恐怖などで身震いする)は感情的な反応によって起こる状態変化と言える。それぞれのタイプの動詞には、次のようなものがある。

- (51) a. 生物や物事の成長、繁栄を表す動詞 : bloom, flower, flourish, grow, prosper, thrive など  
 b. 感情的な反応による状態変化を表す動詞 : blanch, blush, pale, shudder, shiver, tremble など

では、なぜこれらの動詞は他動詞になれないのだろうか。それは、生物の成長や感情的な反応が、それを経験する人や生物、物事自体によって自発的にもたらされる変化であり、それらの原因となりうる使役主と変化との因果関係が弱く、必然性に欠けるからであると考えられる。それゆえ、これらの動詞は、主語として使役主を明示する必要のある他動詞にはなれないことになる。3.1節で見た rust や erode が表す「質の低下」の事態においては、雨風にあたれば必ず金属は錆びるし、大地も浸食する。しかし、そうした現象に比べて、(47a)のようなトマトが豊かに実るという事態は、自律性が強いと認識されているのではないだろうか。また、錆びたり、浸食したりする事態は、一般的に言って望ましい現象ではなく、人間の関心事として、現象を助長する原因を明示して表す必要性がある。一方、トマトの豊作は、それ自体が最大の関心事であり、そうした事態を引き起こす原因を、あえて他動詞の主語として明示する必要性に欠けると言える。もうひとつのタイプである blush や pale などの感情的な反応についても、これらの変化事態の自律性が高く、他動詞の主語として、感情的な反応を引き起こす原因を明示しがたいからだとと言える。

#### 4. まとめ

本稿では、英語の状態変化動詞の自他交替について、動詞の意味内容を中心に考察した。英語の自他交替する状態変化動詞は、その自動詞用法において、概念上自発的な変化であると捉えられる事態を表す場合に交替が可能となる。他動詞用法のみの動詞の特徴は、変

化を引き起こす使役主の役割や責任が大きくて重く、概念上それを排除できないため自動詞文で表すことができないと言える。自動詞用法のみの動詞については、変化と使役主との因果関係が客観的に見て弱い事態を表すことがわかった。ここまでの分析をまとめたものが表 1 である。

表 1

	動詞の意味特徴	状態変化の特徴	例
自他交替する動詞	自発的な変化として概念化できるため、使役主を明示しなくてもよい事態を表す。	変化の手段が特定されていない状態変化	Pat broke the window. The window broke.
		質が悪化するなど、変化対象物が本質的にその変化傾向を備えている	The rain has rusted the gate. The gate has rusted.
他動詞用法のみの動詞	使役主の役割、責任が重大であるため、その存在を必ず明示しなくてはならない事態を表す。	存在を消す、または修復不可能な程度の大きい状態変化	A violent storm destroyed the houses. *The houses destroyed in a violent storm.
		状態変化の手段が特定されている状態変化	She cut the cake. *The cake cut.
		意図的な動作主の介入なしには起こり得ない状態変化	John opened the beer. *The beer opened.
自動詞用法のみの動詞	変化の使役主と変化事象との因果関係が弱い事態を表す。	生物の成長や物事の繁栄	The animals thrived in the rich grasslands. *The rich grasslands thrived the animals.
		感情的な反応による状態変化	I always blush when I speak in public. *Speaking in public always blushes me.

以上のことから、英語の状態変化動詞の自他交替に関して、それぞれの動詞の意味特徴や自他交替の可否を決定づけている要因が明らかになった。ただ、今後さらに、表1のまとめで示したことをさらに包括的に説明づけられる制約があるのか、またより多くの動詞の振る舞いを調べるなどして、考察を深めたいと考えている。

## 注

\*本稿は、平成23年度学習院大学英文学会（平成23年10月15日）における口頭発表原稿に、加筆修正を施したものである。発表や本稿執筆に際し、中島平三先生、高見健一先生をはじめ、多くの方々から貴重な指摘や助言を頂いた。また、本稿の査読者からも大変有益なご指摘をたくさん頂いた。ここに記して感謝したい。

- 1) 高見・久野（2002）を参照。
- 2) 高見・久野（2002：244）は、影山（1993：60-61）が日本語の「死ぬ」「降る」が、非対格動詞ではなく、非能格動詞であると主張する証拠に「命令形」での使用が可能であることを挙げていることに関して、(i a, b)は命令形ではなく祈願文であるため、それぞれの動詞の非能格性の証拠にはなり得ないと指摘している。
  - (i) a. 早く死ね！
  - b. 雨、雨、降れ降れ...
- 3) Tamly(1985)のオンセット使役、同延使役は次のような事例を説明する概念である。
  - (ii) a. オンセット使役：The ball's hitting it made the lamp topple from the table.
  - b. 同延使役：The ball kept rolling because of the wind blowing on it.
- 4) 例外として *deteriorate* が挙げられる。
  - (iii) a. John's health has deteriorated.
  - b. \*Stress has deteriorated John's health.

L&RH（1995）は、*deteriorate* の他動詞用法の適格性については、母語話者でも判断が分かるとしながらも、彼女たち自身は違和感があると指摘している。

《参考文献》

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京, ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』東京, くろしお出版.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー』東京, 松柏社.
- 丸田忠雄 (2000) 「動詞の語彙意味類型と語彙の拡張—walk を例に」丸田忠雄・須賀一好(編)『日英語の自他の交替』, 209-240, 東京, ひつじ書房.
- Perlmutter, David M. (1978) “Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis,” *BLS* 4, 157-189.
- Talmy, Leonard (1985) “Force Dynamics in Language and Thought,” *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity at the Twenty-First Regional Meeting*, 293-337, Chicago Linguistic Society, Chicago.
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』東京, 研究社.
- 都築雅子 (2010) 「使役交替構文」足立公也・都築雅子(編)『学校文法の語らなかった英語構文』, 55-85, 東京, 勁草書房.

《辞書》

- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, (Third Edition).
- Longman Dictionary of Contemporary English*, (Fifth Edition).